

原爆文学研究会報

第八号

原爆文学研究会 二〇〇三年一月

遺構 戦後を生きるわれわれにとって、原爆投下は常に時間的な「隔たり」をもって回顧される出来事である。われわれと原爆との距離は、時間的に刻々と遠ざかりつつある。そのような「隔たり」を超えることを目指して、想像という営為はあるのだろうか、原爆に関する記録や物語も綴られてきたのだと、言って良いだろう。

ただし、時間的に遠ざかるとしても、その場所に立つことはできる。二〇〇三年一月十五日（土）の西日本新聞一面には「消える被爆の「証人」と見出で、長崎市の新興善小学校の校舎取り壊し決定を伝える記事が載っている。（原爆投下直後、被爆者治療の最大の拠点となった長崎市興善小学校校舎について同市は十四日、全面的に取り壊す方針を固めた。跡地に予定している市立図書館新設に伴い一部保存する計画だったが、「図書館敷地を広く取るためには保存は困難」として計画を変更した）。（全面取り壊しに方針を変更したことに伴って同市は図書館内に同小の壁や窓枠などを再利用して救護所を再現した部屋を設ける予定）。古い建物が壊され、新しい建物が作られる、街が息づくためには必要ないに違いない。まして「全国」の県庁所在地で唯一市立図書館を持つていない「長崎市にとって、その土地の確保は非常に重要なことになるのだろうか。しかし、遺構から受ける独特の衝撃が何ものにも代え難いことも確かだ。長崎の城山小学校被爆校舎、針尾電波塔、広島の中国管区司令部の地下通信室、沖繩の地下壕等、中に入ることでできる遺構には、他の眺める史料からは得られない生々しきがある。

原爆との「隔たり」というと、その向こうに本質なり、核心なりが鉱脈のように包蔵されているかのような印象を与えてしまう。勿論、そのような思考の方法を相対化することは必要だが、「隔たり」と言ってしまういたくなる何かを感じてしまうこともある。それが何なのか。遺構の内と外で考え続けたい。（中野 和典）

第八回 原爆文学研究会報告



二〇〇三年九月二十七日（土）広島市まちづくり市民交流プラザで開催した「第七回 原爆文学研究会」には、約五〇名が集いました。今回は「広島に文学館を！市民の会」と共催で会を執り行いました。片山氏の研究発表に続く質疑応答では、「夏の花」のエピグラフは、作品集全ての巻頭に置かれているのではないかと「エピグラフに浪漫的な解釈を行うのが妥当だとして、それがどのような問題につながるのか」等の発言がありました。

川口氏の研究発表については、「戦争の「被害／加害」という関係のとらえ方が被爆者の多層性の捨象や被害と加害との交換を召還すること自体をどのように考えればよいのか」「純粋な戦争犠牲者」といえる人々もいるのではないかと「等の発言がありました。

◇ 研究発表

被害と加害のデイスクール

——「広島よ、おごるなかれ」と「ヒロシマというとき」、
そして『戦争論3』——

川口 隆行（台湾・東海大学文学院日本語文学系）

原爆（文学）を語る場に被害／加害という記憶が（もしくは、被害／加害を語る場に原爆《文学》が）、どのように召喚されて、そこにどのような問題が生じ、現在なお生じているのかといったことを、栗原貞子の言説を中心に、本島等の発言、小林よしのりのマンガなども視野に入れて考察した。

栗原貞子の六〇年代後半から七〇年代は、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（一九六五）に見られるような「被爆者」Ⅱ「被害者」という図式を転覆することで、原爆（広島被害）を語る場に、日本の戦争責任（アジアへの加害）の表現を生み出す、〈加害と被害の複合的自覚〉の道程であった。ベ平連運動Ⅱ〈ベトナムに平和を！〉市民連合への参加はその重要な契機となる。ベ平連の機関紙『ベ平連ニュース』の栗原関係の記事を詳細に検討すると、それまでの自分の表現が届かないアメリカという他者との出会い、異文化接触・交流・衝突による境界性（marginality）の感覚の発生という事態が見出される。そうした境界の感覚から〈加害〉を語る際の正典「ヒロシマというとき」（一九七二）という詩が生み出される。と同時にそれは自己防衛機制の所産でもある。「ヒロシマというとき」の加害と被害、糾弾と謝罪の交換の論理は、一見他者との開かれた関係を志向するように見えて、他者からのナルシスティックな自己承認の欲望

を内包しているのである。同時期の栗原の評論的言説が、「あの戦争」を「自由主義」対「ファシズム」という史観でしか把握できなかったこと（アメリカという他者の隠蔽）と通底し、戦後日本のナショナリティを再構築するものであった。

〈広島よ、おごるなかれ〉（原爆は落とされるべきだった）といった元長崎市長本島等の挑発的言辭（一九七七～一九九八）は、そこに日本の戦争責任Ⅱ「加害」を考える一定の意義を認めたとしても、やはりアメリカの原爆投下を結果的に正当化してしまうに違いない。本島発言は永井隆の「原爆天刑説」に代表されるような「原爆神話」に栗原貞子の言説が接合した論理的帰結だとも言えよう。

このようなある種ステレオタイプな加害者意識と罪悪感に自縛されることは、反動的に自己肯定Ⅱ被害者意識の物語を無理やり作りあげてしまうことにならないか。実際、本島発言とほぼ時を同じくして刊行された小林よしのり『新ゴーマニズム宣言SPECIAL』戦争論1・2・3（一九九八、二〇〇一、二〇〇三）は、極めて質の良くない自己肯定Ⅱ被害者意識の物語を構築するために、「原爆」「広島」の記憶を、実に巧みに動員しているのである。



川口氏、質疑応答の光景

◇ 広島訪問記

今回は、本会員でもある水島裕雅氏のご提案により、「広島に文
学館を！市民の会」との共催で第八回原爆文学研究会を開催した。
小学校に併設された「広島市まちづくり市民交流プラザ」に着くと、
会場は既に満員。五〇部準備していただいていた発表資料もまたた
くまに無くなってしまった。



片山氏、発表の光景

発表は、川口氏の他に片山典子氏（広島女子大学大学院生）とウ
ルシュラ・ステイチェ
ック氏（広島大学大
院生）の両名にお願い
した。

片山氏のご発表『夏
の花』三部作―エピグ
ラフを廻って―は、原
民喜「夏の花」三部作
のエピグラフ『我が愛
する者よ／請う急ぎ走
れ／香しき山々の中
にありて／獐のごとく小
鹿のごとくあれ』を民
喜の他の著作と関連づ
けながら読み解くとい
うものであった。解釈
の方法や資料の読み込み方も詳細で、「春」のもつ平和の象徴性や語
り手とその姉・妻との深いつながり、死者に手向けられる鎮魂の言
としてのエピグラフの位置づけ等、説得力のあるものだった。

このような原爆死没者への鎮魂を美しいものとして昇華すること
が、敗戦直後の状況も鑑みて、どのように意味づけられるのか、そ
こにどのような問題があるのか、今後、聴き手の側も考えてゆく必
要がありそうだ。



ウルシュラ・ステイチェック氏、発表の光景

ウルシュラ氏のご発表は、ポーランドにおける原爆投下の報道を
当時の新聞記事から探るといふものだった。取上げられた資料は
「STANDAR LUDU」
「KURIER CODZIENNY」
「ZYCIE WARSZWY」
の三紙である。三紙と
も原爆を「世界を変え
る恐ろしい発明」ある
いは「すばらしい発明」
等として報じている。
ソビエト経由の報道が
多かったのではいかと
いう、予測に反し、原
爆投下直後にはロン
ドンやニューヨークから
発せられた情報を伝え
ていたこと、一週間の
後にソビエトびいきの、アメリカ帝国主義を批判する報道がはじま
ることなどが報告された。

国家間の地理的、国際的な関係が戦争報道に与える影響を考える
手がかりとしても興味深い発表となった。

（報告 中野 和典）

彙報

第八回原爆文学研究会

- 日時 二〇〇三年九月二七日(土) 一四時より
 - 会場 広島市まちづくり市民交流プラザ
 - 内容 研究発表
- 『夏の花』三部作―エピグラフを廻って

被害と加害のディスカール

片山典子

川口隆行

ポーランドにおける原爆投下に関する新聞報道

ウルシユラ・ステイチェツク

懇親会 一八時より

編集後記

第八回研究会の開催にあたって、会場の設営、会の進行、懇親会の準備にいたるまで、「広島に文学館を！市民の会」の皆さまに多大なるご助力をいただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。お陰様で、研究会、懇親会ともに大変充実したものになりました。会発足以来、福岡と長崎と交替で会を開催し、いつか他の場所でも…という要望は早くから寄せられていたので、今回はありがたい機会になりました。広島では会場一杯に参加者が座っており、通常ならば机を囲む形態で会を行いますますが、それもできず、参加者の自己紹介の時間も取ることができませんでした。この会報にも掲載

しております写真のような状態で、普段とは違った緊張感もあり、会としても良い刺激となりました。参加者も非常に熱心な方が多く、質疑も活発なものになり、「広島に文学館を！市民の会」の皆さまの意気込みにも触れることができました。

早いもので、本研究会も発足以来二周年を迎えようとしています。その間に、実にいろいろな方に発表をしていただき、議論を行ってきました。今後より刺激的な問題提起ができる会となることを切に願い、努力していきたいと思えます。

(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>